

# 仙台司教区

# 教区事務所だより



(第 38 号)  
昭和55年12月1日

「ようこそ、ガスパリ大司教様！」

― 教皇庁大使、仙台司教区公式訪問 ―

秋の心地よい日差しを受けて、10月24日、  
定刻の11時40分、ひばり5号は郡山駅に到着。  
黒のコートを着ていたにもかかわらず、から  
だ全体に明るさをたたえて、ガスパリ大司教様  
がホームに降りたち、佐藤司教様と力強い握  
手を交わされました。

この日から10月30日までの一週間にわたる  
大使にとって初めての仙台司教区訪問の第一  
歩が印されたのです。

「ようこそガリラヤの地へ！」ドミニコ  
会のP神父様のユーモアのある歓迎で、すっ  
かりくつろがれたご様子です。

大司教様は、「大使」という、一見いかめし  
い感じのする印象がどこにもなく、むしろそ  
れは、あたたかな、人間味のある司牧者の姿  
でした。

それは随所でいかに発揮されたのです  
が、特にミサでの説教は素晴らしいものでし  
た。前もってよくご準備がなされており、し

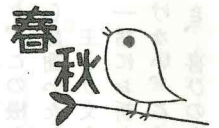
かも、その場に適したメッセージがきちんと  
伝えられていました。

ミサ以外の時は、まさにイタリア人であり、  
大きな声で豪快に笑い、歌い、地中海の澄ん  
だ、明るい青を容易に連想することができま  
した。

途中でわかったことなのですが、大司教様  
は、この訪問のあとすぐに白内障の手術を受  
けるとのことでした。そんなこととは知らず、  
あまりの明るさと楽しさのため、時がたつの  
を忘れてつい話し込んでしまったこともあり  
ました。

一週間という、長く、ハードなスケジュ  
ールにもかかわらず、終始笑い声を絶やさない  
大司教様と接する機会が与えられたことは、  
非常に幸いなことであり、お会いすることの  
できた教区内の司祭、修道者、信徒の人々に  
強い印象を与えたことでした。

(笹氣直哉神父)



霊的読書。最近ほとんど耳に  
しないことばである。かつて、  
神学校、修道院、黙想会でも日  
課の中に霊的読書の時間があっ  
た。なのに、どうしてその言葉が  
聞かれなくなったのだろうか？  
このような問いを発すると、進歩的と自称  
する人々から、「公會議以前」、「古」と  
いうお言葉が返って来そうである。

しかしながら、私は霊的読書を好む。その  
ための本を少なからず持っている。気に入れ  
ば何度でも読み返す。その一冊に、小さい姉妹  
イエズスのマドレーヌの著したものである。  
クリスマスが近づいた今、かの女の次のこ  
とばが思い出される。「このペトレヘムの馬  
ぶねは、すばらしく美しい、すばらしく偉大  
な何かを持っています。それもそのはず、神  
であり人であるお方、キリストの全てを包ん  
でいるからです。そして、この馬ぶねという  
ゆりかごにたつらなって、ナザレトの大工の仕  
事場、ご受難と十字架、復活と天の栄光のす  
べてがあるからです。」

マドレーヌは、イエズス誕生という出来事  
の中に、イエズスの十字架と死、復活を視てい  
る。これは、神殿でひとりの幼な子に救いを視  
たシメオンとアンナのまなざしと同じまなざ  
しでもある。まさに今こそ、私たちは自分の  
まなざしを問うとき、問われるとき、それが  
クリスマスのある一面といえそうである。(S)





全国私学教育研究集会

仙台を会場に



10月22日から3日間、仙台市の私立中学・高等学校を会場に、全国私学教育研究集会が開催された。参加者は約一五〇〇に達し、盛會裡に、教科研究会、部会討議が終了し、大きな成果をおさめた。

この全私研は、毎年大会開催地を各地に移し、中・高校の教職員が参加して行われるもので、その運営は財団法人日本私学教育研究所(理事長・堀越克明)が中心となっている。今回の宮城大会は、実行委員長松良宜三氏(常盤木)を中心に、鈴木理郎氏(朴沢)田原武氏(ウルストラ)が副委員長となつて、15の分科会、八つの部会、ことに日頃の教育の研究発表がなされた。特に大会初の宗教部会では、キリスト教・仏教の学識者によるパネルドイスカッション、青森、明の星、ウルストラ、弘前・聖愛三校からの研究発表、更にグスタフ・フォス師(イエスス会)の講演等があり、教育における宗教の必要性があらためて認識された。

祝 百周年 — 大河原教会 —

宮城県大河原教会では、来る12月7日(日)、教会百周年を記念して、盛大な祝賀を行う。今から丁度百年前の11月23日、大河原に、第一号の受洗者が誕生した時を、大河原教会の第一歩と考えたものである。この大いなる歩みと、これからの道に神の祝福を祈りたい。

・ 仙台教区

修女連研修会



奥村一郎師を講師に



去る11月2日(日)、仙台教区修道女連盟主催の修道女のための研修会が、仙台白百合学園を会場に開かれた。今年の定例の研修会はすでに春に行われたが、今回のものは、修道会総長管区長会議の要請を受けて、奥村一郎師を講師に、「受肉の神学」というテーマで全国的に行われている研修会の一つである。

まず最初に、今までの修道女会総長管区長会議で昨年取り組んでいる「キリスト教の土着化」について、その歴史の変遷と、今後の課題について話された。アジア司教会議

ガスバリ教皇庁大使をお迎えして

大湊教会 加藤真理子

大湊教会では、ガスバリ大司教・教皇庁大使をお迎えするにあたって、何よりも、ゆっくりくつろいでいただくことができるようにと、皆、心からこの日を待っておりました。

10月29日、夕方六時半、高瀬神父様の運転で、大使、司教様のご到着。

ご聖体訪問をなさった大使に、早速、横島神父様は一人一人を紹介して下さいました。温かく見つけて下さる大使の前に出て、何か今までの緊張もほぐれ、心も体も軽くなったのは私だけでしょうか。

佐藤司教様は、「大使と夕食を一緒にできたのは大湊教会だけですよ。高瀬神父様は、

(FABC)でも、アジアにおける地方教会へのキリスト教の受肉という点で話し合われている。

日本においては、歴史的に見ると、第二バチカン公会議前後から「適応」(Adaptation)という言葉が使われ、その後「土着化」(Indigenization)となり、現在「Inculturation」文化的受肉という言葉に表われる。キリスト教をその国の文化に根づかせる」という事に焦点が当てられている。その為には、諸宗教、諸思想、諸文化との対話が必要であり、信仰の庶民性が問われる。来年の管区長会議では、「現代日本の土壌に受肉する使徒的霊性」というテーマで、更に一層の研修の深まりが期待される。当日の参加者は96名であった。

大湊はくじにでも当たったのですか?と聞いています」と、言われたので、皆で歓笑。また大使は、「本州最北端にあるこの地が神の国に最も近いと思います。先程、お一人ずつ紹介して頂きうれしく思いました」と、お話し下さいました。

バチカン市国のこと、日本大使館のこと、大使館に働いていらっしゃる方々のことなど、質問に詳しくお答え下さる大使にお目にかかり、この機会を与えられましたことを、心から感謝いたしております。

主と文を日本語で、ガスバリ大司教様と一緒に祈りし、記念撮影。その後、思いがけない、ご絵のプレゼントを一人一人いただき、喜びのうちに別れいたしました。



三浦、平賀 二師

\* 教区に、帰還 \*



佐々木、安井師 中央で活躍続く!

三浦平三師は、昭和45年、望まれて中央協議会事務局長に就任。日本カトリック教会の中枢に3年間参与。更に、カトリック新聞社の理事・編集長として、今日の安定した基礎を築き、各方面から感謝されている。

今回、10年間の教区外の活動を終え、教区に帰還した。しばらく休養の後、邦人司祭団の一員として、司牧宣教路線に復帰する。

平賀徹夫師は、昭和52年、命じられてローマに留学。教会法を修得の後、カナダ・オタワ大司教区で実習と視察、去る9月帰日した。今後、教区事務所、教会裁判、法制関係の分野で、新進気鋭の活躍が期待される。

なお、教区外で活躍している仙台教区司祭に、佐々木博師と、安井光雄師がいる。

佐々木師は、宣教司牧センター所長として日本の教会と社会の刷新のため、福音化をめざして、そのビジョン作りに取り組んでおり、司祭、信徒の再養成のためにも活躍している。安井師は、上智大学法学部教授として教えるかたわら、民事訴訟法学会からの依頼で、文部省から奨励金を得て、世界の民事裁判の歴史研究をしており、郷里八戸に帰る際には、諸団体からの依頼で講演をされるなど、予備宣教に大きく貢献しており、両師共、健在である。

司教様を囲んで

練成会

青森・浪打教会

10月18日(土)、青森市浪打教会では、佐藤司教様の指導で、練成会が行われた。

青森市内三教会(本町、篠田、浪打)が中心となり、県内各教会に呼びかけ、老若男女合わせて80名の信者が参加した。

聖歌と祈りによる開会式に続いて、司教様による基調講演が行われた。

「人間の存在は、今この瞬間しかない。だから、今ここでキリスト者として真剣に生きる事が大切である」との主旨で、信仰の自覚と実生活の場での証明が呼びかけられた。

続いて、六つのグループに分かれて話し合いがなされた。それには、司教様の配慮で、

①神の国と教会 ②信仰と常識 ③富の功罪の三つのテーマが出された。信者として、日頃いだいていた悩みや疑問などが、ざっくりばらんに話し合われ、活発な意見交換がなされた。

その後の全体会における各グループからの報告には、司教様から、それぞれ明解な助言をいただき、長年疑問に思っていたことが、明らかになって喜ぶ人、司教様と身近に接して感謝する人など、3時間足らずの短い時間ではあったが、それぞれに得るものが多かった。

その後司教様を囲んで、なごやかな夕食の一時を持ち、散会した。

(浪打教会・信徒会長・川瀬英嗣)

老人ホーム

”さつき荘” 訪問

△福島県信徒連絡協議会V

10月26日午後一時から、白河市の太陽の国老人ホーム”さつき荘”を訪れる。

白河、郡山、福島(野田町)各教会の代表男女含めて20名が参加。お年寄りのお話し相手になる、ことばの慰問である。

ホームは、設立後5年目で、寝たきり老人約70名と、なんとか動ける老人をあわせて、百名おり、食事など一切を世話する寮母さん26名が昼夜介護に努めている。

各部屋を、三三人ずつに分かれて訪問。各人各様に話題は広がり、お互いに親しみを増し、いくらかは、お年寄りをなぐさめる事ができたのではないかと思う。

時間は短くとも、今後教多く訪ねる機会のあることを願い、祈っている。

(野田町教会・木戸清吉)

司教様の日程

12月1日 カテドラル建設委員会

2日 ラ・サール会創立三百年記念ミサ

7日 大河原教会百年祭

8日 教区司祭団月例会

8~9日 人事委員会

21日 司牧評議員会

24日 クリスマスマシサ





仙塩地区壮年連盟懇話会に出席して

もしも司祭が居なければ…

塩釜教会・佐々木正吾

10月19日、仙台の元寺小路教会で、仙塩地区壮年連盟の月例懇話会がもたれ、今回は特別勉強会として、講師にオタワ愛徳修道会のブッシュ・モニック姉をむかえ、「典礼の理解と積極的参加」と題して、内容豊かな話をうかがいました。過ぎ越しの祭りから始まるミサの歴史的理解と、ミサの各個所に従っての精神的な意義を、適確な言葉でまとめ上げました。

その後、モニック姉の講話を基に、参加者一同が手分けして、「司祭不在時の主日礼拝」の組み立てを行ない、礼拝にかかりました。私は説教グループで最年少(30代)でしたので、恥をしのんで説教台に上りました。そんなわけで今回の礼拝の感想は、

まず第一に、全体を通して「みじめさ」を感じました。毎日曜日、あたりまえにあずかっているミサ：このミサが、司祭が居なければ出来ないのだ、という事実を膚で感じました。司祭なしに行なう主日の礼拝とは、一見何と勇ましく雄々しく、場合によっては積極的な信徒の活躍と見えるかもしれないが、いざ自分達で行なってみると、まぎれもなく、パードレのいないかくれキリシタンのようであり、毎日曜日の光栄に満ちたミサとは、天と地程の違いのあるみじめなものでした。

今回集まった方々は、教会内でも社会的に

も第一線でめざましい活躍をしている方々ばかりです。それなのに、司祭の居ない礼拝というのは、皆安全な囲いをはずされた小羊のようにオロオロするばかりです。司祭がいなという事は何と頼りげがなく、不安なものなのだろうか。仙台教区の近い将来を考えた時、「いつか小教区に主任司祭が居なくなったら：いやそんな事はあってはならぬ」など複雑な気持ちで礼拝を終えました。

次に、説教とはこんなにむずかしいものかと感じました。学校の講義とは本質的に違います。説教台の上で話すという事は、何を話しても、結果としてその人の信仰告白をしているのではないかと思いました。諸々の知識は説教のための道具の一つにしかすぎず、それらを使って自らの信仰告白の場だという事が分かりました。そして私が、いかにカラッポか分かりました。無いものは出せません。有るように見せても、それは聞く人の心を打たないでしょう。

司祭の居ない主日礼拝には、任命を受けた「教会奉仕者」が司式することになっておりますが、「教会奉仕者」とは私達信徒なのです。この主日礼拝には、説教が大切なウェイトを持つものになるでしょう。ところが、それは私達でやらねばならなくなるのです。ただ寒けだけが走りまわりました。

今回の特別勉強会は、ミサの理解を深めた事もさることながら、私達信徒の一人一人の心に、司祭の召命の重要性和緊急性をひしひしと感じさせた一日でした。

### 塩町教会 バザー盛會

塩町教会では、10月5日バザーが開催され、晴天にも恵まれ、百八十五万円位の利益をあげた。色々な係が全ての人に用意されたが、主任神父様児山六七男師は、天気の係でした。バザー実行委員長・佐々木浩さんが、その日、朝夢をみたそうです。それによると、児山神父様が、教会の屋根に上って何かしている。みていると、竿をのばして雲をかき集め、綿アメにして食べていたということです。

バザー益金は、教会建設資金となるが、教会以外の方々他教会の方々にも絶大なる援助を頂いて感謝している。

### G・シュトルム個展

Λ 岩手カトリック・センターV



去る10月25日から11月4日まで、岩手カトリック・センターで、ベトレム会・G・シュトルム師の絵画展「二戸の花」が行われた。

スイス生まれの神父様が、日本の在任期間の大部分の21年を北福岡で宣教にたずさわりその間二戸地方の草花を水彩画にまとめたものを、今度個展として発表したものである。神の創造の傑作が、見事に絵になつた感じで、好評であった。

訂正とお詫び 10月と11月号のわが教会の教会カットは反対でした。お詫びいたします。なお今回はわが教会は休載します。



ガスパリ教皇庁大使のメッセージ

”キリスト者の家庭”

このメッセージは、10月26日(日)、仙台・元寺小路教会司教座 聖堂のミサにおいて、仙台教区民に向けて話されたものです。

カトリックの教義に従っていえば、キリスト者の家庭とは、一人の男性と一人の女性が互いに愛し合うため、独占的な夫婦関係の誠実さのうちにあって、互いに自分を完全に与え、また助け合い、与え合う不可分な一致である。更に、人類社会と神の国建設のために、子供を生み、キリスト教的に教育してゆくための一致でもある。こうした家庭は、社会にとっても、教会にとっても、最も本質的な、「基礎共同体」であり、健全な社会の礎石、心理的に均衡のとれた社会の基礎でもある。

また幸福の宝庫にもなり、人々はそこから、活動や労働のエネルギーをくみ取るのである。それゆえ、キリスト者の家庭は、人間が互いに愛すること、愛されることの経験を積んでゆくところでもあるが、この愛の動機は、人びとの素質や学識、能力にあるのではなく、存在している、ということだけによるといえる。そこにいるから愛されるのであり、人は、どんな状況にあろうとも、生きること、幸福であることを望むものだからである。

このような家庭は、教会のいわば、基礎的細胞であり、第二バチカン公会議という「家

庭の教会」(Ecclesia domestica) (教会憲章二)なのである。

家庭は、両親も子ども達も、神を愛し隣人を愛することを学ぶ最初の学校でもある。「愛と業が常に存在しているところ」(現代世界憲章)と、神の啓示が私たちに教えている。それゆえキリスト者の家庭とは、神の子ども、キリストの兄弟が永遠の生命に与るため、神の大家族に向けて歩み続けているものなのである。

このように、キリスト者の家庭の本質を考えただけで、こうした家庭が、現代社会において、大きな困難に遭遇していることを知ることが出来る。教皇ヨハネ・パウロ二世が、しばしば注意を促しているように、今の社会は、「消費者の精神」によって抑圧されており、消費することだけにとらわれて、疲れた、喜びのない人生を送り、そのために社会は苦しんでいる。所有する量によって、人を評価し、飽くなき性の満足を求め、あらゆる場で、その実現の方法を探し求める。人生の究極の目的が、あたかもそれであるかのように、個人的利益の追求に明け暮れている。現代社会

は、誠実とか、犠牲の精神を笑い、権利は主張するが、自分の責任のことは簡単に忘れて

いる。そして倫理的な、いろいろな力を抑圧する 相対主義の中に溺れてしまっている。

また、マス・メディアは、本能のより低俗な利己的な欲望の満足にもとづく人生の見方を、家庭の中にまで、浸透させている。どんなことでも自由に許してしまう私達の今の社会では、社会のワク、通念、世論、法律であってさえも、本当に人間的で、キリスト教的な家庭生活の理想像を、もはや支えることが出来なくなっている。従って多くの家庭は、荒れ狂う大海の激浪に、ほんろうされる小舟にも似ているといえるだろう。彼らには、何らの安全も与えられず、正しく方向づける何らの助けも与えられていないのである。

キリスト者の家庭がこうした状況の中で生き続けるためには、内からの大きな力が絶対に必要である。それは聖霊の力であるが、騒々しくさわぎ立て、自己を誇示するようなものではなく、謙虚で、物静かなものといえる。しかし、聖霊こそは、神ご自身の神的エネルギーに他ならず、他のすべての力に優って偉大な力である。

聖霊は、しばしば三位一体の「きずな」と呼ばれているが、永遠なる御父と御ひとり子の相互の、そして共通の愛そのものだからである。私達一人ひとりにも与えられたこの同じ聖霊は、私達が愛の新しい旋を生きぬくために、有効な原動力となってくれるものである。



この愛は、神と、神によって愛されている人びとの方へ、この二つを分離することなく向かっていく。そして人を、「他の人びとのために存在する人」に形作っていく。すなわち、存在そのものの中に、喜びを見いだし、他人の生きがい、繁栄、幸福を見いだすことの出来る人格を形成してゆくのである。このような無私無欲の愛は、他の人びとの心の中に、相互愛を作り出し、こうした愛を持つ人びとは、「ひとつの心、ひとつの魂」(使4の32)を持つ人びとになっていくのである。この一致は、三位一体の神から創られた人類の最高の幸福を実現する。

人はまた、キリスト者の家庭生活の中に、聖霊が働きかけるかけがえない役割を理解できる。神的きずなである聖霊こそは、婚姻の本質である「きずな」の基礎である。婚姻の式の間、新郎新婦は、彼らの約束と誠実を互いに誓い合う。多くの国に昔から伝えられているものもある。「私達は、夫婦として、順境にあつても、逆境にあつても、病気の時も健康の時も、生涯互いに愛と忠実を尽くすことを誓います」ということは、儀式の最も感動的な場面であるといえよう。

まだ弱く、不安定な若い二人が、どんな方法で、この生涯の誓いを果たし得るのであろうか。家庭の幸福のために、どうしても必要なこの誓いは、聖霊の導きによる神への信頼によって確かに可能なものとなるのである。実際、人は変わりやすいものだが、神は不変なお方である。人は、常に不忠実なものへの

誘惑にさらされているが、神は常に忠実なお方である。そのお方が、若い夫の手に新妻をゆだねられ、また新妻に夫を与えられる。そして、かれらの共同の誓約を承認されるのである。神は自ら彼らと共におられ、肉からのこの世からの、そして悪魔によるあらゆる誘惑にもかかわらず、婚姻における忠実さと愛を生涯かけて守り通しうる恵みを、豊かに与えようとされる。秘跡が執行されるうちに現存される神は、婚姻における最も重要な証人でもある。

信仰の恵みによって一致した夫婦は、イエズスの聖心に従って船出した結婚生活を、最後まで、忠実に、また幸福に生き抜くことができるであろう。

キリスト者の家庭は、何よりも必要な聖霊の充滿を、どのようにして得ることができらうか。この問いに、イエズスご自身が答えている。「天の父が自分に求める者に聖霊を与えて下さる。」(ルカ11の13)

懇願すること、祈ること、私達が聖霊を豊かに受けるための最良の方法はこれである。私達の祈りの源泉は聖霊ご自身である。聖霊は、いろいろな形のもとに祈りの心を刺激し、全き信頼をもって、「アバ、父よ」と、呼ばせる。

イエズスは常に祈り、常におん父と一体であった。イエズスは、私達が一人で、また家庭で共に祈ることを望んでいる。私達は、キリストから来たものであって、キリストによって生き、キリストの内に歩むものである。

このことが、私達の家庭で生きた経験となり得るのは、祈りによってである。だから、もし私達がキリスト者の家庭を救おうと望むならば、何よりも、祈る家庭を作ることである。教皇が言われたように、「祈りとは、人間の心の深奥に伝わる神のみ声であり、御父に起源を持つすべてのものを再び御父に引きもどすものである」。教皇はアイルランド訪問でも、「一家そろって、毎日欠かさず祈るよう願われたのである。家族全員の個人的祈り、共同の祈り、ミサや秘跡への参加などがその家庭の呼吸となるまで、できる限り努力すべきである。それゆえ、しばしば祈る習慣を身につけさせるように、夫婦や家庭を助けるあらゆる運動は、私達の支えであり、勇気づけてくれるものである。

信仰の呼吸、愛の表現である祈り、それは聖霊の導きの下に、常に私達の家庭を支えてくれるものである。こうして、地上に、平和で明るい家庭が築き上げられ、それらは、父と子と聖霊の永遠の交わりの内に実現する神の大家族を作る下地になり、準備となっていくのである。





1980  
教区目標

聖書に基づいた

家庭における

子供の

信仰教育

(3)



「家庭に祈りを」

石井 恭一

あるカトリックの乳児院では、毎朝、保母が乳児を一人ずつ抱いて集まり、祈りを唱えているそうです。その時、保母の腕の中の赤ちゃんは眠っているかもしれませんし、泣いているかもしれません。しかし、この時、保母の口を通して赤ちゃんたちの祈りは確実に神のもとに届いています。

私事になりますが、私は幼いころ、祖母のひざの上でよく祖母の祈りをきかされました。五十年近くたった今でも、私はその時家庭祭壇にもとされていたローソクのゆらめきや、イエズス様のご像などをはつきりとおぼえています。これは私自身の祈りの出発点だったようです。

少年のころ、私の家の隣に住んでいた遊び友だちの家族は、日蓮宗の一家でした。夕方になると、その家からお経の音がきこえてき

ました。私は時々、大変不作法ですが塀のふし穴から隣の家をのぞき、私の遊び友だちが両親のそばにキチンと座り、仏壇に向かって大きな声でお経を唱える姿をみて、そんなかたれに、尊敬に似た気持ちを得たものでした。

もう何年前か前になりましたが、かつてラ・サール・ホームで生活し社会へ巣立っていった卒園者が、奥さんと二人の子供をつれて、二十数年ぶりに訪ねてきました。その人はあいさつをすまると、すぐ奥さんと子供たちをお聖堂につれていきました。そして子供たちにお父さんはね、お前くらいの年の時に毎日ここで祈りをしたんだよ」と話してきかせました。そして、なつかしうに周囲をみまわしながら、「私はここで祈りをしたことをいつも思い出します」と言うのでした。

その人は信者ではありません。しかし少年のころにラ・サール・ホームで皆と一緒に祈ったことが、大人になってもかれの生活を支えているのを私ははつきり感じました。

今年の教区の目標は、「聖書に基づいた家庭における子供の信仰教育」ですが、司牧評議会はそれを受けて、「家庭に祈りを」とよびかけました。そして、まず何よりも親自身の祈る姿を求めています。

私達は結果をあまり心配せずに、まず「祈ってみる」ことが大切ではないでしょうか。祈るのは不完全な人間ですが、その祈りをおききになるのは全能の神なのですから。

(ラ・サール・ホーム院長)

仙塩地区カトリック壮年連盟の動き紹介

仙台・塩釜地区の壮年男子の連盟組織「仙塩地区カトリック壮年連盟(会長 岩下新太郎)」では、年5回の懇話会を中心に、お互いの親睦と研修を深めている。

今年の主な活動は、次の通りであった。

2月17日 八年度総会(ミサ、総会、懇話会本年度活動の課題として「壮年として福音宣教にどう取り組むか」を決定。

5月18日 第一回研究懇話会

「いわゆる「実子特例法」をめぐって」

7月20日 第二回研究懇話会

「カトリック者の労使観」

9月28日 第三回研究懇話会

「家庭における信仰教育」

10月19日 特別勉強会

「典礼の理解の積極的参加」

11月16日 第四回研究懇話会

「歴史・靈性・積極的参加」

指導「Srモニック・ブッシュ

主日の礼拝

「仙台教区のかかえる諸問題」

吉田昌民神父様



